

「実践報告」

## 思考力・表現力を育み、対人スキルの向上を目指す中学校社会科授業 ～教科指導の中で行うSSTやSGEの実践を通して～

島 瑞江（長崎大学大学院教育学研究科教職実践専攻）

内野 成美（長崎大学大学院教育学研究科）

キーワード：対人スキル、ソーシャルスキルトレーニング（SST）、思考力・表現力

### I 研究の背景と目的

#### 1. 実践研究テーマの設定理由

通常学級における発達障害の可能性のある児童生徒の割合は6.5%（文部科学省, 2012）であり、30人学級では約2名いる計算となる。発達障害のある生徒は、コミュニケーションに困難を抱える場合が多く、学校や学級への不適応を起こし、トラブルや不登校になるケースもある。しかし、不適応を起こすのは、特定の子どもだけではない。中学生特有の発達段階の課題、家庭や社会の状況なども、要因になっている場合が多い。そのような生徒の状況や個々の特性を理解し、全ての生徒が安心して過ごせるために、学級担任は、温かい学級環境をつくる必要がある。しかし、中学校では、小学校と異なり教科担任制となる。そのため、学級担任だけでなく、各教科担任が授業の中で生徒にどう接し、どのような指導をするかということも重要である。教科担任の姿勢や指導が生徒一人一人の学習意欲を左右するだけでなく、対人スキルの向上にも大きな影響を与えたと考え、本テーマを設定した。

#### 2. ソーシャルスキルトレーニングの意義

ソーシャルスキルの定義は、「日常生活の中で出会う様々な問題や課題に、自分で、創造的でしかも効果のある対処ができる能力」（WHO）、「対人関係を円滑に運ぶための知識とそれに裏打ちされた具体的な技術やコツ」（相川, 2005）、「相手がどのような人なのかを理解し、自分の思いを相手が理解できるような言葉や態度にして、適切に相手に抵抗なく伝える技術」（河村, 2002）など諸説あるが、簡潔に言うと、「対人関係を営む知識と技術」である。挨拶や返事、お礼や謝罪、相手の話を聴くことなどもソーシャルスキルの一つであり、生活の中で日常的に使えるものも多く、そのスキルは、家庭や社会生活の中で育まれてきた。しかし近年、少子化や核家族化の影響で、以前に比べて子どもたちは家庭で多くの人と関わるのが難しくなり、コミュニケーション不足となっている。そのため、感情のコントロールや対人関係のスキルが未熟な子どもが増加しているとの指摘もある（文部科学省, 2010）。

また、中学生の時期は、自意識と客観的事実との違いに悩み、様々な葛藤の中で、自らの生き方を模索し始める時期である。大人との関係よりも友人関係に意味を見出し、仲間同士の評価を強く意識する反面、それ以外の他者との交流に消極的となることもある。特に親に対しては第二反抗期を迎え、場合によってはコミュニケーションが不足しがちとなる時期でもある。このような中学生特有の課題と家庭や社会の変化に伴うコミュニケーション不足という課題の一方で、価値観や生活スタイルが多様化していく社会を生き抜くための主体的に

力強く生きていく能力が求められ、コミュニケーション能力がますます重視される。

これらの理由から、学校では、子ども達が多く集う場面を意図的に作り出し、子ども達に対して計画的な対人関係の体験学習をすることが強く求められている。集団生活を通して社会人を育成することが学校の使命であり、そのために、全ての子どもに対するソーシャルスキル教育が必要不可欠である。

### 3. 新学習指導要領からみたSSTの意義

平成29年告示の中学校学習指導要領「特別活動編」の目標（全体目標）には「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」のための資質・能力の育成が掲げられており、学校教育において「人間関係形成」能力の育成は重要な課題となっている。また、新学習指導要領では、全ての教科等の目標及び内容を「知識及び技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で再整理し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進している。そのため、教科指導の中で、対話を活かした学習活動を仕組むことは大変重要である。

### 4. 研究の目的

本研究では、対人スキルの向上を教科指導の面から行うことを目的として、担当教科である中学校社会科の授業の中で、ソーシャルスキルトレーニング（SST）や構成的グループエンカウンター（SGE）を実践し、その効果や課題を検証した。また、その実践によって、教科指導の目標の一つである「思考力・表現力」の向上が可能かどうかの検証も行った。

## Ⅱ 研究の概要

研究の概要は、以下の通りである。

○実習1～4 ・ 配当学級の生徒一人一人の実態把握 ・ 道徳や短学活でのSSTとSGE ・ 先生方への実習のフィードバックと教育のユニバーサルデザインに関する研修	○実習5 ・ ソーシャルスキルに関する実態把握 ・ 授業における継続的なペア活動やグループ活動 ・ 定期テストにおける記述問題の正答率調査
--	--

## Ⅲ 実践および結果

### 1. 実習1～4

長崎市立A中学校3学年3学級（男子57名、女子35名、計92名）を対象に、39日間の学校教育実践実習を行った。特別支援的な配慮や支援について学び、効果的なSSTを検討する上で、自身の専門教科である社会科だけでなく、様々な教科の授業や道徳・学活の様子を観察させていただき、道徳の授業実践や短学活でのSSTおよびSGEを実践した。

#### (1) 実施内容

##### ①『学校適応感尺度アセス』による実態把握

対象：3年X組（男子18名、女子12名、計30名）

実施日：202X年9月4日、202X+1年2月5日

目的：学級と生徒一人一人の実態把握

## ② アサーショントレーニングの実施（道徳）

対象：3学年3学級（X～Z組）

実施期間：202X+1年 9月～10月（各学級1回，計3回）

活動内容（授業の主な流れ）：

- ・事例をもとに、自己主張の3つのタイプを教える。
- ・ロールプレイを用いてアサーティブな自己表現の大切さを実感させるための活動を行う。
- ・振り返りとして、アンケートを実施する。

## ③ SST，SGEの実施（朝の短学活にて）

対象：3年X組（男子18名、女子12名、計30名）

実施期間：202X+1年 9月～12月（合計4回）

活動内容と目的：

- ・『手遊び』（リズム感、集中力等）
- ・『ホメホメ言葉』（自己と他者の受容、ほめ言葉のレパートリーを増やす等）
- ・『列対抗担任の似顔絵描き』（状況把握と役割の自覚、コミュニケーション力向上）
- ・『傾聴トレーニング』（練習を通して傾聴力を身に付ける）

## ④「教育のユニバーサルデザイン」の職員研修とアンケート

対象：長崎市立A中学校職員（25名）

実施日：202X+1年 2月19日、放課後（40分間）

方法：図書室にて校内研修（職員研修）

- ・プリント資料を配付し、スライドで示しながら説明や疑似体験（約30分間）
- ・アンケート記入後、テーブル（4～5人）毎に気づきや感想を話し合う
- ・まとめ（各テーブルの感想の紹介など）

目的：実習校の掲示物や授業、学級づくりをユニバーサルデザインの視点を持って観察し、得た学びを先生方にフィードバックすると共に、各先生方のUDへの意識や取組についてアンケートを通して知る。

## (2) 教育のUD研修会の結果と成果

アンケート結果より、授業で実施しているUDの工夫が多かった取組は、「ペアやグループでの学び合い活動」「チョークの色分けなどでポイントを示す」「めあてや学習の流れを視覚化」などであり、少なかった取組は、「板書を少なめに構造化して示す」「特性や人間関係に配慮した座席や班」「一問一動作を意識した短い指示」であった（図1）。

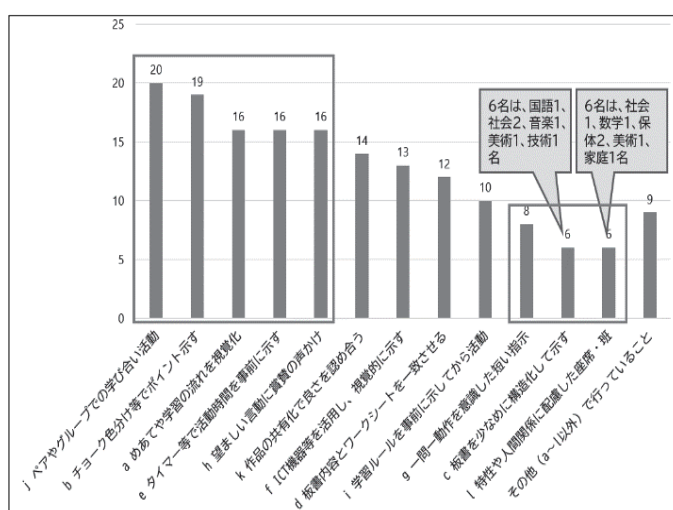


図1 『教育のUD』研修会アンケート結果(多い順)

これを教科別に比較すると、工夫が多く見られたのは社会や国語であった。もともと書く量が多い教科だけに、それをどう減らして効率よく、分かりやすく取り組ませるかを様々な工夫されていた。あげられた工夫の数が少なかったのは理科だったが、「ICT機器の活用」や「ペアやグループでの学び合い活動」の割合は他教科に比べて多かった(図2)。このように、教科の特性を活かしたUDの工夫が行われていることが分かり、実習5での授業づくりにとって、とても参考になった。また、実習校の先生方からも、互いの工夫を知る良い機会になったと言ってもらい、意識向上につなげることができたと感じられた。

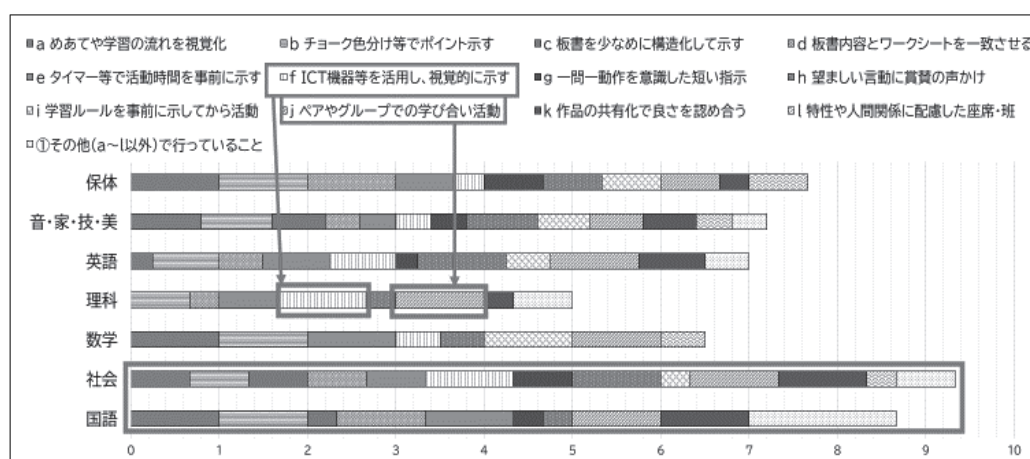


図2 『教育のUD』研修会アンケート結果(教科別)

### (3) SST、SGEの実践に対する考察

成果としては、朝の短学活や授業の導入の際、短時間でも活動を行うことによって、活発な一日の開始や授業の活性化につながった。相手や自分の良い面に気づき、話し方・聴き方などコミュニケーションスキルの向上につながった。同級生との対話が苦手な生徒が、友人関係を構築するきっかけになった。対人スキルの向上は、教え合い学習の充実にもつながり、学力向上も見込める可能性があることが示唆された。

課題としては、時間確保の問題があげられた。実習では、実習曜日や教科の授業などで時間が限られるため、目的を明確にし、計画的に活動を仕組む必要があった。また、活動参加が困難な生徒への対応に関して、適切な配慮を行いつつ当該生徒も参加しやすい活動を考えたり、個別対応の支援者がいない場合は、そばに行きサポートしたり、班の構成を工夫し、サポートできる生徒の近くにするなどの対策が必要であると考えた。

## 2. 実習5

### (1) 対象と期間

【実習対象学年】長崎県立B中学校2学年3学級(男子47名、女子60名、計107名)

【期間】全観察期間：202X+1年4月～12月

### (2) 実態把握

①学年職員への聞き取り、生徒の観察

②学年共通の道徳授業の観察「アドジャンで傾聴スキルアップ」4月13日

目的：傾聴スキルアップ、コミュニケーションが苦手な生徒の把握

③学年共通の学活の授業実践とふり回りアンケート「挨拶のSST」5月10日

目的：挨拶の意義と良い挨拶について理解し、実践意欲を高める

④「ソーシャルスキルに関するアンケート」5月、12月（2回実施）

### (3) 授業実践

①社会科授業におけるペア活動 6～12月

②班活動での調べ学習・発表学習とふり回り 10月、11月（2回実施）

### (4) 検証

①班活動のふり回りアンケート

②ソーシャルスキルに関するアンケート

③「校訓追求調査」8月、12月（2回実施） ※勤務校での実施分を比較・検討材料に使用

④定期テストにおける記述問題の正答率調査

### (5) 実態把握の結果

『SSに関するアンケート』（学校生活や授業の中で、生徒に身に付けさせたい3つのスキル「コミュニケーションスキル」「集団行動スキル」「仲間関係スキル」に絞った自作の質問紙調査）の結果

○「コミュニケーションスキル」で低い項目

- ・相手に分かりやすいように話す
- ・集団の前で自分の考えを述べる
- ・嫌なことや怒りを言葉で伝える
- ・周囲と異なっても自分の意見を言う

課題⇒「伝える力を身に付ける」「積極的に意思表示をする」へのアプローチが必要

○「集団行動スキル」で低い項目

- ・失敗や予定外のことに對する柔軟な対応
- ・仕事や課題に取り組む際、計画を立てて実行する

課題⇒計画性や挑戦心を育て、伸ばす必要

○「仲間関係スキル」で低い項目

- ・はじめて会った人でも、進んで話しかけることができる

課題⇒いつでも誰に対しても自分から話せるよう、対話の経験を積ませる

### (6) 授業での実践内容

① 社会科授業におけるペア活動

実態把握を踏まえて、社会科の授業では、ほぼ毎時間の授業でペア活動を実施した。用語や意味の説明をし合う、ビデオ視聴の感想を述べ合う、教師が出す質問に答え合う、など、短時間の簡単な活動を通して、根拠を述べたり、分かりやすく話したり、自分の考えを述べたりする経験を意図した。

#### 【留意点】

互いに体を向け、相手の目を見て、適度な声で話すこと。聴く側は「傾聴スキル」を意識し、うなずき、あいづちを心がけることなどを事前に説明し、実践させた。



## ② 社会科授業における班活動

地理的分野の単元のまとめ学習で、班活動を2回実施（九州地方と近畿地方）

## 【活動の流れ】

- ・各自で学習単元（九州地方、近畿地方）に関するウェビングマップを書く（図3）。
- ・ウェビングマップを見せ合い、4人班でテーマを決め、役割分担をして、調べ学習を行う。
- ・班で1枚の発表資料を、クロムブックのジャムボードを使って作成（図4）。
- ・発表の際は、班全員で前に出て発表する。

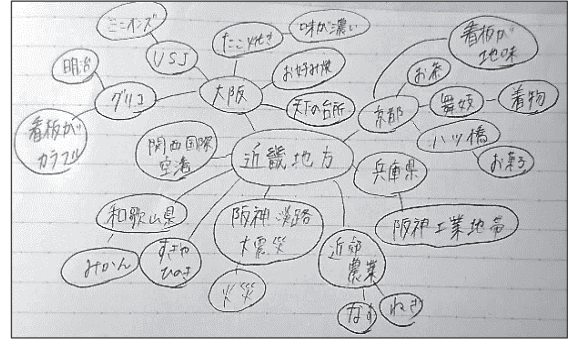


図3 ウェビングマップ(生徒ノート)の例

聞き手は分かったこと、良かった点をメモし、良かった点を発表する。

### 【留意点】

調べ学習が個別の活動にならないよう、「テーマ設定の理由」「気づき」「私たちの考え」は必ず班全員で話し合って記入し、発表させた。また、発表会で良い点を出し合うことで、互いの良さに気づき、認め合う関係や自信につなげたいと考え、挙手や積極的な発言を促した。

### 【1回目の振り返りと2回目への対策】

○振り返りアンケート(自己評価) 結果より

- ・「ウェビングマップ作成を通して、学習した知識を関連付けることができたか」について  
「よくできた」(50%)「できた」(44.1%)
- ・「班活動で自分の意見を積極的に言うことができたか？」について  
「よくできた」(63.7%)「できた」(31.4%)
- ・「班活動で、友達の意見をよく聞き、協力して“私たちの考え”までまとめることができたか」について、「よくできた」(52%)「できた」(41.2%)



図4 発表資料(クロムブックのジャムボード)の例

## ○成果と課題

- ・興味のあるテーマの調べ学習を協力して行う中で、自由な会話が増えた。
- ・大部分の生徒が、自分の意見を言い、相手の話を聞いていると感じていた。
- ・クロムブックの画面を見ながら会話することがあり、目を見て話すコミュニケーションスキルアップという点では課題であった。

⇒2回目は、時間を区切って話し合いをさせ、話し合う際には、画面を見ないというルールを決めて活動させた。

## (7) 結果と考察

### ① 班活動のふり回りアンケート結果と考察

#### 【結果】

1回目と2回目を比較すると、全ての質問に対して「よくできた」「できた」が増加し、ほぼ100%になっていた。

#### 【考察】

2回目に達成感を得た生徒が多かった理由として、考えられることを以下に記載。

- ・活動の流れを1回目でつかんだことにより、見通しを持って学習に取り組めた。
- ・画面を見ないで話し合うルールを設けたことで、話し合いが活発に行われた。
- ・班員と活発に議論し、考えをまとめることで、自信を持って発表できた。
- ・他者の意見をよく聞き、その表現方法を参考にしながら、自分の意見を組み立てられた。
- ・発表会で聞き手が「良かった点」を発表したが、回を重ねる毎に「良さ」を見付ける視点が増え、互いの良さを認め合う関係が自信につながった。

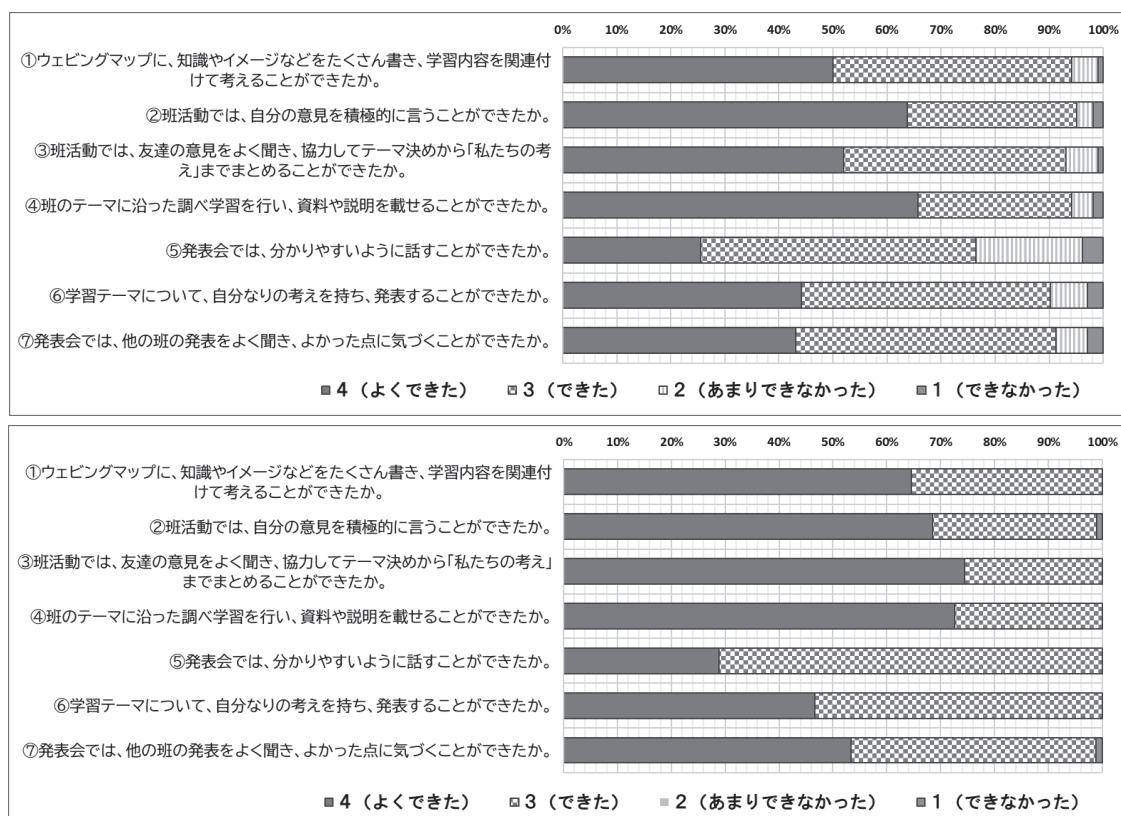


図5 班活動ふり回りアンケート結果（上:1回目、下:2回目）

## ② ソーシャルスキルに関するアンケート（5月と12月を比較）の結果と考察

### 【結果】

- 「コミュニケーションスキル」が大きく上昇 ※特に大きく伸びた項目が5つ（図6）
  - ・相手の話をさえぎることなく聞く
  - ・発表やスピーチで相手に分かりやすいように話す
  - ・正しい姿勢で発表やスピーチができる
  - ・集団に向かって自分の意見を述べる
  - ・話し合いの内容に沿った発言ができる
- 「集団行動スキル」が上昇 ※特に大きく伸びた項目が1つ（図7）
  - ・適度な距離で人と接する（くっつきすぎない）※伸びた項目が4つ（図7）
  - ・状況に合わせた適切な言葉遣いをしている
  - ・異性と適切に関わることができる
  - ・仕事や課題に取り組む際、計画を立て、それに沿って実行している
  - ・系の活動をするとき、何をどうやったらよいか意見を言っている
- 「仲間関係スキル」は変化なし（高い数値を維持） ※伸びた項目は1つ（図8）
  - ・友達と秘密を共有している

### 【考察】

授業の中で、継続的に対話や話し合い、発表などの活動を行うことが、特にコミュニケーションスキルの向上につながった。話すことが苦手な生徒も、簡単な活動や自由に発言できる雰囲気の中で、活発に話すようになり、発表の声が大きくなり、挙手回数が増えた。聴き方の向上が話し手の自信を持った発言を促し、互いの良さを認め合うことで良好な人間関係や温かい集団づくりにつながったと考えられる。

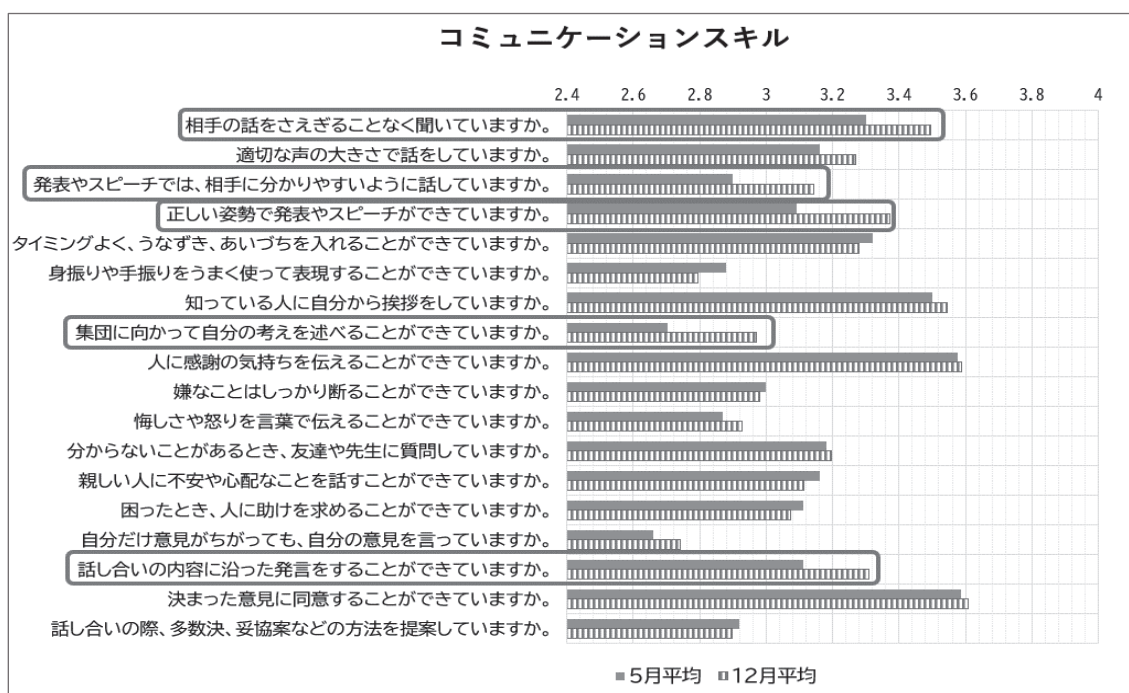


図6 「コミュニケーションスキル」のアンケート結果



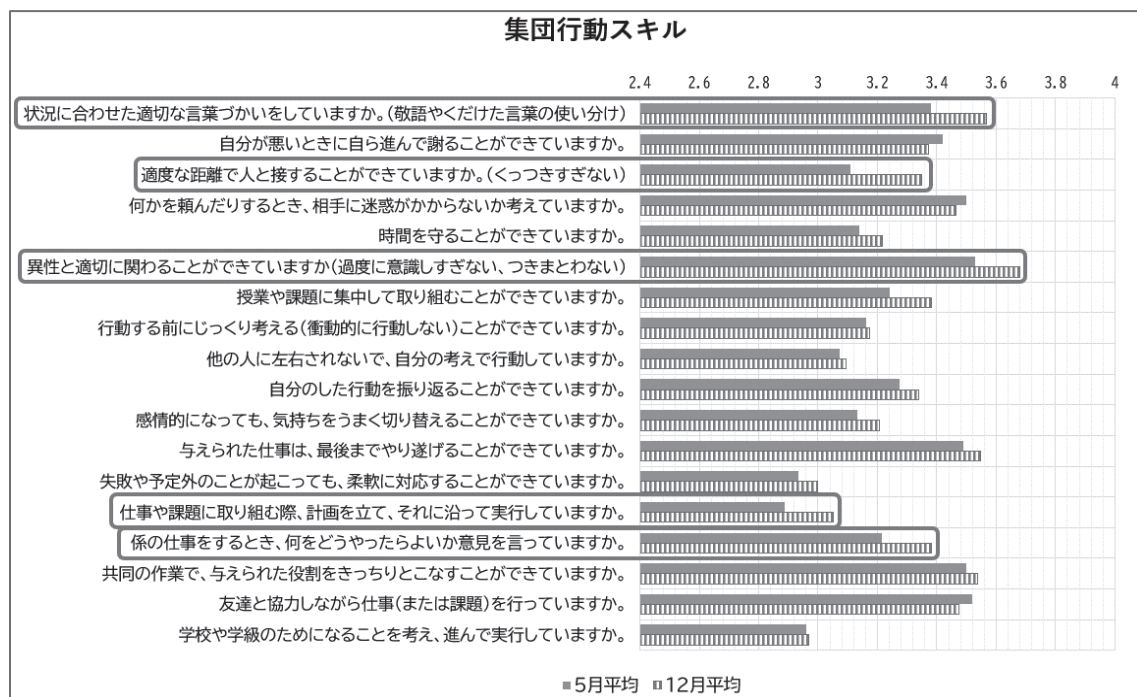


図7 「集団行動スキル」のアンケート結果

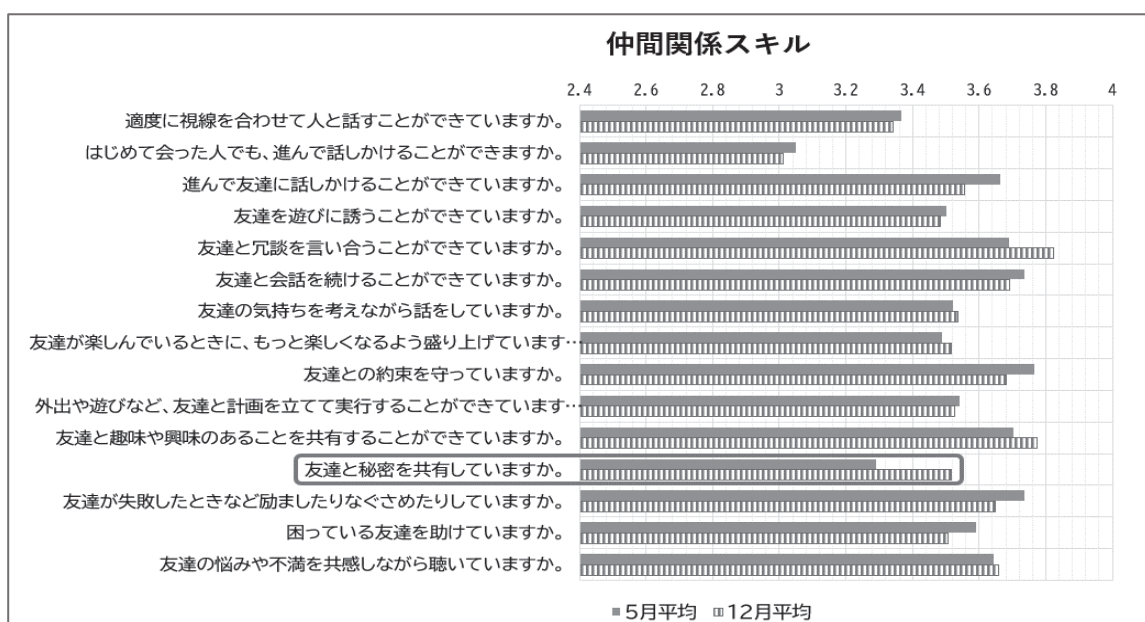


図8 「仲間関係スキル」のアンケート結果

### ③ 「校訓追求調査」8月と12月の比較と考察

【結果】 (図9)

- ・1回目 (8月) 調査では「計画性や挑戦心の低さ」が示された (SSアンケートと同結果)
- ・2回目 (12月) 調査では「失敗を恐れず挑戦できる」「適切に自己評価し、改善できる」「次のステップを創造することができる」「夢や希望を持ち、努力することができる」が大きく伸びていた。
- ・「自分の役割を果たそうとする」「健康で活力にあふれている」は大きく低下していた。

## 【考察】

結果では、SSアンケートと同様の傾向が見られた。特に、行動力や挑戦心が伸びたことは、生徒の行動観察からも見て取れた。ただ「見通しを持って計画的に動く」は、伸びが見られず、一見、矛盾があるようにも感じられるが、これは、学習活動は計画的にできたが、委員会活動や係活動については新型コロナウイルス感染症の影響もあり、予定していても延期や中止などで見通しを持って計画的に行うことができなかったことでの不安や達成感の低下が影響したと推測される。

## ④ 定期テストにおける記述問題の正答率調査

### 【結果】

正答率は少し低下していたが、無回答の数が減り、部分点を得た回答の割合は2学期期末で増加していた（図10）。

### 【考察】

問題の難易度など条件を全く同じにはできず、これだけでの判断は難しいが、部分点正解の増加は、自分の考えを表現しようとする意欲の表れでもある。今後は、思考力・表現力を伸ばすことで、正確に読み取り、じっくり考える時間を与え、書くコツをつかませることが重要だと考えた。また、文章の構成力を育てるには、書く習慣も大事だと実感した。

## IV 総合考察

本研究は、SSTによって生徒一人一人の対人スキルの向上を目指すとともに、思考力・表現力の向上の可能性についても検討を行った。本実践研究での取り組みによって、対人スキル（特に「コミュニケーションスキル」）の向上が見られた。人前で話すスキルを高め、他者の話をよく聴き、対話を通して考えを広げることは、人間関係形成や集団行動スキルの向上にもつながるとの結果を得た。ただし、思考力・表現力を磨くためには、個人でも深く考え、書くことを意識づける指導の工夫も大切であると実感した。今後は、授業シートの記述の分析など他の方法も用いて効果の有無を測りつつ、効果的なSSTを研究し続けたい。「全員が参加し、分かる授業」「一人も置き去りにしない授業」を目指し、今後も更なる研鑽を積みたい。

## V 主要参考文献

- ・河村茂雄・品田笑子・小野寺正己（2008）.『いま子どもたちに育てたい学級ソーシャルスキル（中学校）』 図書文化社
- ・文部科学省（2017）中学校学習指導要領（平成29年告示）解説「特別活動編」「社会編」

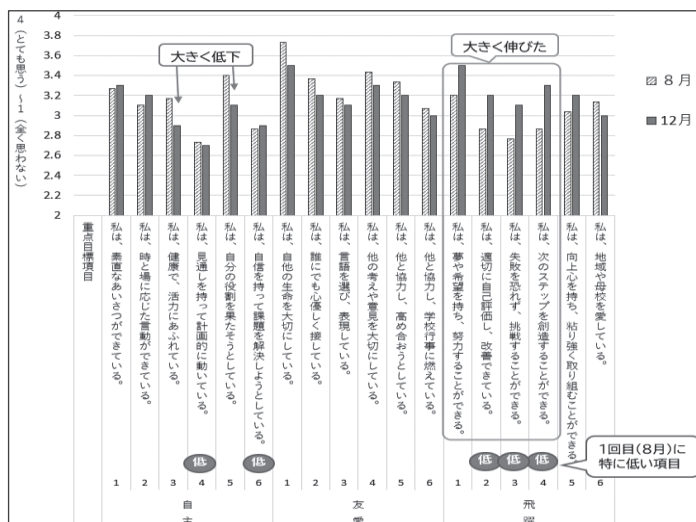


図9 「校訓追求調査」学年生徒アンケート結果

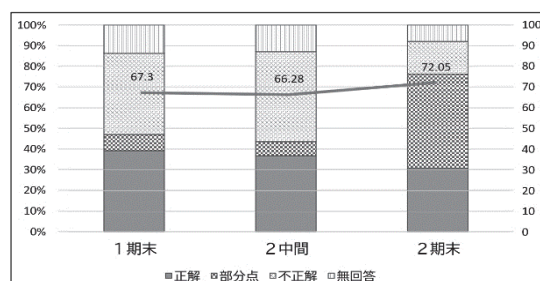


図10 定期テストの記述問題正答率と平均点